

「トビラ」の先にある光へ

二戸市立福岡中学校一年
澤田 光加

小学校三年生の冬、私の人生は大きく変わった。その日は冬の日にしては気温が高く、一段と滑る日だった。集団登校で学校に向かっていった私は、途中の下り坂でもちをついて転んでしまった。最初は「痛いな。」くらいの我慢できる軽い痛みだったが、教室へと向かう階段で背中から腰にかけて強い痛みを感じた。朝の出欠確認で目の前がゆがみ、不安になって鉛筆をもってみると自力で握れなくなっていた。怖くなって担任の先生に話そうと立ち上がり数歩歩いたところでその場に倒れてしまい、そのまま救急車で病院に向かうことになった。

「どうしたんだろう。」
私は突然体が動かなくなったことに対する不安で気持ちが悪く落ち着かなかった。その日は病名が出ず、翌日大学病院に転院することになった。「どうせよくなって元に戻るだろう。」と小学三年生の自分は当時の状況を重くとらえていなかった。病名が分かるまでに二週間くらいかかり、「脊髄こうそく」という病気であることが分かった。

地元の小学校で新たな生活が始まった。しかし、自分が想像していた学校生活とは異なるもので、今まで仲の良かった友人たちと大きな距離感ができたように感じて寂しい思いをする日々だった。「今の自分をどうにかして変えたい。」その思いを胸に今年の四月、中学校に入学した。最初は学校生活についていけないか不安でいっぱいだったが、いろんな先生が温かく迎えてくれてとても安心できた。学級目標決めでは「トビラ」という私の意見を取り入れられた。みんなで新しい扉を開きたいという思いで出した言葉だった。入学後すぐの大きな経験となった。

中学校で最初に行われた行事は体育祭だった。小学校ではなかった組団に分かれた創作応援練習や、応援練習は先輩の存在がとても大きく、組団活動や練習の時の緊張感は今まで一番強く、一生懸命取り組んだ。だからこそ、体育祭本番で応援賞をとれた時の達成感や体全体に喜びが駆け巡るような最高にうれしい瞬間を味わうことができた。

体育祭が終わって徐々に普段の生活に慣れてきた。普段の学校生活を振り返る心の余裕もでき、改めて生活を振り返った時、入学してから今まで自分の心を支えてくれた人の存在に気付くことができた。それは担任の先生である。自分が感じた不安や焦りなど思ったことを家族

お医者さんに病名を伝えられた直後はどんな病気か、すぐ治るものか正直ピンとこなかった。詳しく説明を聞いていくと、治療法がない稀な病気であり、この病気にかかった多くの人はほとんどが元の身体に戻ることが出来ないことを知った。今の自分では考えられないが、当時はお医者さんの話を素直に受け入れ、車椅子生活に変わったことに対しても深く落ち込んだり自分を責めたりせず過ごしていくことができた。

病気が告げられてから二ヶ月後、リハビリに専念するために病院へ入院することになった。そこには自分と似ている病気の子や、さまざまな病気を抱えた人たちがリハビリを頑張る姿があり、私はすごく安心したのを覚えている。「人じゃないんだ。」そう思えた。その他にも、看護師さんが明るく励ましてくれたことやリハビリと一緒に頑張る同年代の友達も出て、辛い治療も乗り越えることができた。

一年後、リハビリの成果が出て退院することができ、

以上に話せる存在だ。

先生はいつも私のいいところを見つけて励ましてくれる。先生の温かい言葉を聞く度に「もう少し頑張ってみよう。」と一歩踏み出す勇気をもつことができた。体育祭で創作応援に参加するか迷った時も「大丈夫、ゆっくり覚えていけばできるよ。」と私のことを信じて笑顔で励ましてくれたことで体育祭本番は創作応援を最後まで踊りきることができた。何度か心が折れそうになり、先生にきつく当たってしまった時、自分の思いを上手く伝えられない時もあったが、先生はいつも私のために出来ることは何かと一緒に考えてくれたり、ダメなことはだめと伝えてくれた。そんな先生の優しさに気が付いた時、私も先生のような存在になりたいと思った。自分が先生に温かく支えてもらった分、私もこれから関わる人に真剣に向き合い、優しさを届けられる人になりたいと思う。そのためにも自分から積極的にいろんな人に関わっていく努力をしていきたい。「トビラ」の先に待っている新しい可能性に期待しながら。

イスバスから学んだことまな

桜川市立大和中学校 三年

篠崎 迅しんじ

数年前、車椅子バスケットボールチームの練習に参加させてもらったことがある。車椅子バスケットは、障害の有無や性別に関わらず、誰でも楽しむことができ、一九六〇年のパリンピック第二回大会から実施されている人気競技の一つとなっている。

体育館に入ると、

「キュッ、キュッ、ガシャン！」

というタイヤの音と、車椅子同士が激しくぶつかり合う光景に、私は思わず息を飲んだ。

チームの代表の斎藤さんは、高校三年生の時にバイク事故に遭い、下半身不随となり、車椅子生活を余儀なくされた。リハビリで車椅子バスケットと出会い、二十二歳の時に単身、障害者福祉が充実しているというアメリカに渡り、本場アメリカのチームで十年間プレーしたそうだ。「車椅子だからできないということはない。やってやるう、と思った。」

と話してくれた。そして、

ボールがタイヤに当たって、飛んでいってしまう。ベルトでシートに体を固定しているので、ボールを拾うのも一苦労だ。シュートの練習では、車椅子から見上げたゴールが、いつも以上に高く見え、足に踏ん張りがきかないため、ボールはリングにかすりもしなかった。頭の中では理解しているつもりでも、体は思うように動かず、想像以上にハードだった。悪戦苦闘している私に、チームの選手の方たちは、優しく声をかけてくれた。シュートが決まるまで何度もアドバイスをもらい、成功した時にはみんなが一緒に喜んでくれた。

私のイスバス初挑戦は、不甲斐ないものだった。しかし、得たものは大きかった。車椅子に乗って、みんな大声を掛け合いながら、同じ目線の高さでプレーをしているうちに、いつのまにか障害の有無など関係なくなっていて、私の中にあつた壁のようなものは取り払われていることに気付いた。私は正直、体が不自由な人に対して、「かわいそう」とか「大変そう」という気持ちを持っていた。しかし、そんな考えはどこかに吹き飛んでしまった。そして、そんな考えを持っていた自分を恥じた。イスバスチームの選手は、みんな生き生きと生きている、キラキラと輝いて見えた。

最後に、斎藤さんは、

「障害とか健常とかいう言葉はいらなと思う。そんな

「アメリカでは、障害者の斎藤さんとしてではなく、ノブユキ・サイトウとして生きられた。」

と話すように、日本とアメリカでの障害についての捉え方の違いに驚いた。帰国後、車椅子バスケットを親しみやすいように「イスバス」と呼び、イスバスを通して、障害のある人への理解を広めたいと活動している。

それから、初めて競技用車椅子に乗らせてもらった。以前、骨折をしたときに乗った病院の車椅子とは、全くの別物だった。タイヤがハの字についていて、軽くて漕ぎやすい。しかし、漕いで前に進むとすると真っ直ぐに進めない。左右の腕に均等に力を込めないと斜めに進んでしまう。何度も体育館を往復し、慣れたところで、次はいよいよ、ボールを使つての練習だ。最初はドリブルから。イスバスは、ボールを持ったまま二回まで漕ぐことができ、三回以上漕ぐと、トラベリングの反則になる。いざボールを持つと、ボールに気を取られて、車椅子を漕ぐのを忘れてしまう。ドリブルしようとする

と垣根をなくしたい。」

と話した。斎藤さんの力強い言葉は私の心に強く響いた。車椅子バスケットは、障害がある人もない人も同じ条件で楽しめる懸け橋になると思う。バリアとは、実は、人の心の中にあり、無意識に作られているのかも知れない。心のバリアフリーを目指し、垣根を超えた、多様性を認め合える共生社会を作りたい。

体験から広がった世界

聖ドミニコ学院中学校二年
庄子 結士

私は中学一年生の春休みに右足を骨折しました。晴れてむかえた中学二年生の新学期は人生で初めての骨折とギブス、松葉杖生活から始まりました。はじめは簡単な気持ちでした。「松葉杖なんてすぐ慣れる、どうにかなる。」と考えていました。怪我をしてすぐの時は、ヒーローになったみたいにみんなが集まってきて松葉杖に興味を持ったたりギブスに触ってみたりしていました。みんなが興味を持ってくれてうれしかったです。しかし、毎日雪だるまのように出来ないこと、難しいことは増えました。

当たり前に通っていた通学路の何気ないかたむきやでこぼこで松葉杖の運びかたに苦戦したり、2段飛びで上り下りしていた階段も一歩ずつしかできなくなりました。すぐにドアも開けられない、手に荷物を持って歩くこともできない、雨が降ってきた時には傘を持っていてもさすことができませんでした。雨ですべる松葉杖でこけそうになってハラハラドキドキもしました。部活動の遠征に参加して「ゆっくり来ていいよ」と言われても、一生懸

命に松葉杖で歩いていても急いでもどんだんみんなから距離が離れるとなんだか悲しい気持ちがありました。「2階の観覧席から荷物を持ってきて」と言われても人混みを松葉杖で移動し階段を上り下りするのは大変でした。でも「できない」と言ったら何も役に立っていないようで自分なんか必要ないんじゃないかという気持ちになりそうでした。もちろん沢山の人が「大丈夫？」と声をかけてくれました。でも私には「大丈夫じゃない、助けてよ」と言葉にする勇氣はありませんでした。そして迷惑をかけては申し訳ないといついつい「大丈夫です」と言っていました。

そんな中で、部活動の先輩がさりげなく私の荷物を持ってくれたりドアを開けてくれたり、自分が雨にぬれているのに一生懸命に私に傘をさしてくれました。急いでいないときには私の歩幅やスピードに合わせて一緒にゆっくりと歩いてくれました。私は先輩の優しさが嬉しくていつも感謝していました。分かるうとしてくれる人

がいると段々と心も元気になっていきました。

私の松葉杖とギブス生活は四十二日間で終了しました。その生活を通じて日常生活には沢山の不便があることを感じました。それと同時に、親切にしてくれる人のあたたかさに触れる貴重な時間になりました。私のようにせっかく声をかけてくれても「大丈夫」と断ってしまおう人にどう手伝ってあげたらいいのか、迷う人もいると思います。「申し訳ない」という思いで気持ちに反して断ってしまうこともあると知ってほしいです。それでも「いっよ手伝うよ」と寄り添ってくれたり、見守って歩幅を合わせてくれたり、さりげなくやってくれた時に、決して嫌な気持ちにならなかつたことも知っていてほしいです。

私は身近に障害を持った人がいないので自分が怪我をした時の目線から、障害を持った人との関わりについて考えてみました。これからもし障害を持った人に出会い困っている人がいたら、私はこの経験をいかして、分かるうとし勇氣を出して歩み寄りたいと思います。また私のこの経験を知った人が、思いをめぐらせて、少しでもその時の気持ちを同じように感じ取ってくれたらいいなと思います。そして障害をもった人がいたら分かるうとしたり勇氣を出して歩みよったりする人が増えたらいいなと考えています。

自分らしく生きる

あわ
阿波市立阿波中学校一年
なか
中岡
まどか
円

みなさんは、「吃音症」についてどのような考えをお持ちですか？私は、自分が吃音症なので、そのせいで嫌な思いをすることが多々あります。だから、周りの人から見て、自分はどのように思われているのだろうと、いつも考えながら過ごしています。学校生活の中で、周りの人から何も言われないことはなく、吃音症を理解していないので、よく私に尋ねてきます。そんな生活をしている中で、私にとって一生忘れられないであろう出来事がありました。

小学四年生のとき、いつも通り朝の会をしていた時のことです。私の学校では、朝の会で一人ずつあいさつをするというのが決まりで、私はこのあいさつでよくどもつてしまうので、この時間があまり好きではありませんでした。だから、その日も、どもりたくないなと思っていました。ですが、案の定、皆の前でどもつてしまいました。いつもであれば、どもるだけですむのですが、その日はいつもと違ってしばらく声が出なくて、息も荒くなり始めました。

せずに、笑顔で話していました。その様子に、私が今まで吃音症で悩んでいたことが、全部吹っ飛んでいきました。こんなことで、恥ずかしがって悩むことはないと思われずかされました。

私は、テレビ番組で出ていた人のように、自分が吃音症でも、前を向いて自分らしく生きていけるような人になりたいと思いました。自分のことは、周りの人に決めつけられて悲しむのではなく、自分で生き方を決められるようにしたいです。吃音症、それは少数派であり知られていない病気です。けれども、少数派の人が傷つけられない社会にしていきたいです。そして、私自身が自分を恥じることがない、強い人間になりたいです。

めました。その時、周囲の人の目は冷たく、イライラした悪意すら感じさせるものでした。私はそれを見て、胸が張り裂けそうになりました。最後には先生がみかねて、私のことをとばして次の子で終わらせました。朝の会が終わったとき、周りの人が私のことを馬鹿にしてみました。その中でも一番私の心に刺さった言葉は、

「お前、いつも変な話し方しているもんな。」という言葉です。その言葉を聞いて、やはり、私は周りの人から変なんだと思われることを知りました。私が一番恐れていたことです。

暗い気持ちで毎日を過ごしていたある日、あるテレビ番組を見つけました。そのテレビ番組は「吃音症」を取り上げていました。最初は、興味本位で見えていたけれど、私はいつの間にか食っているように見えていました。テレビで取り上げられた人は吃音症で、話すたびにどもつたり、同じ言葉を繰り返して言っていたりしていました。しかし、その人はそんなことを恥ずかしがることなく、気に

手紙てがみ原村 茉華はらむら まなか

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校 三年

「まなちゃんへ。」

ピンク色の封筒にキラキラのシールが貼られ、絵がたくさん書かれた一通の手紙。その手紙を受け取った私は、後悔と嬉しさで心がいっぱいになりました。

私の母は美容師をしています。母のお店には毎日たくさんのお客さんが訪れます。にぎやかな近所のおばちゃん、いつもきてくれる若いお姉さん、小さな子どもたち……。私も五歳くらいからお店でお客さんたちと楽しく話してきました。その中に一人、特に仲良くなったお姉さんがいました。年齢を重ねるスピードがゆっくりで、私より五歳くらい年上なので、当時十歳くらいだったのですが、とてもかわいらしく無邪気に話しかけてくれました。私を見ると、

「まなちゃんー!」

と、笑顔で声をかけてくれました。その笑顔を見ると、私も楽しくなりたくさん話をしていました。

二年前、私は中学生になりました。中学生になった私

は人見知りになり、お店にも滅多に顔を出さなくなりました。

ある日、たまたまお店に顔を出すと、そのお姉さんに会いました。二十歳近くになるのですが、私が小さい頃に見たままの雰囲気で、喋り方も行動も何も変わっていませんでした。まるで小さな子どもを見ているようでした。そのとき、お姉さんがたまたま来ていた別のお客さんへ、

「ふけたねー。」

といきなり声をかけました。お客さんは笑って言葉を返していましたが、人が気にしていることも、何の悪びれもなく直球で口にするお姉さんに苦手意識をもつようになりしました。そして、お姉さんのことを避けるようになっていったのです。

中学二年の秋。母から一通の手紙を渡されました。お姉さんからの手紙です。ピンク色封筒のかわいらしい手紙をそっと開けました。

「まなかちゃんへ。さいきんあえてないね。おねえちゃんはまだまなかちゃんとはなしたいな。」

便箋の行から大きくはみ出して、小学生のような大きな字で書かれています。封筒と同じように、便箋にもシールが貼られ絵が描かれています。たくさんデコレーションして届けてくれた手紙から、お姉さんからの素直な気持ちが届いて私に届きました。

「お姉さんは何でも素直に伝えてくれるんだ。私に会いたいと思ってくれているんだ。」

と心から嬉しく思いました。そして、どんなときもうわべを飾ることなく直球で言葉をかけてくれるお姉さんのことを十分理解できず、会うのを避けてきた今までを深く後悔しました。

中学三年生になった今、お姉さんがお店に来たときは、たくさんお話します。まるで昔に戻ったかのよう。お姉さんは小さい頃から見てきた姿と何も変わりません。かわいらしい声、無邪気な話し方、そして明るいひまわりのような笑顔。お姉さんが話す言葉には嘘偽りは一切ありません。お姉さんは素直な気持ちで思ったままを直球で私に伝えてくれます。私はそれがたまたまなく嬉しいです。

人は大人になるにつれ、自分をよく見せようと強がり、飾ったり、ときに嘘をついたりしてしまうことが

あります。しかしお姉さんは純粋な素直な心をいつまでももって私に接してくれます。私は、お姉さんから学ぶことがたくさんあるように思います。これからも、お姉さんとたくさんたくさんお話をし、心の交流を続けていきたいと思えます。